

- (1) 単元名：もっと「学び」をいかそう。「よみ取る算数(1)」
- (2) 単元の目標：資料から必要な情報を選択し、問題を解決することができる。
- (3) 本時の目標：必要な情報を選択し、問題を解決することができる。

一学期に5年生において実施(リフレクションシート no73)した活用型問題(かなりレベルは高い)を、二学期は4年生で検証を試みた。二学期の新学期早々ではあるが、一学期の5年生における地区算数ブロック研究授業後に、二学期には4年生でやってみたいとのことであった。4年生は一学期の途中から担任が長期休暇(産休)をもらい、6月から定臨教師が担任になっている。「学びの共同体」って何?学びの授業って?「どうしよう。」臨時教師で突然の赴任である。不安を重々察することができる。ぜひ互見授業等で、教師も仲間達とその「不安」を共有してほしい。「安心」は学校に関わるすべての人に還元されたい。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【本時の課題の把握】 本時の課題を実に丁寧に下す。



前の席のグループはそのまま、後ろのグループの子ども達を、フロアに座らせて確認する。余計な言葉もなく、的確に教師の言葉が子ども達の眼から入る。

E先生の言葉がとっても聞きやすいのはなぜ?まず、少ない言葉数である。次に、繰り返さない、説明にせよ確認にせよ論理的に言葉が実に理路整然としている。子どもの思考を邪魔しない。

食い入るようにテキストとの対話が進む。ルールがある。「分からなければ訊く」である。



【ワークシートの配布】 問題の条件を整理する。 各々 → グループで確認



写真①



写真②



写真③

写真①、授業者は各グループで「一声かけて」子ども達の様子をうかがいながら配布していた。ちょっとした行為ではあるが、このちょっとした言葉かけが奥にいる伏せている子らを救うことになる。写真②、タイムサービスによる商品の値段の変動を資料を基に記入する。課題を解決するための資料作りでもある。写真③、もくもくと資料からワークシートを埋める。「分からないことは訊く。」「これでいいのか?」不安や確認があれば仲間と確かめる。授業者は最小限の言葉数にしたい。

【気にかける仲間達】

仲間の手元を気にかける。気にかけてくれる仲間が居るからぼくは一人にはならない。つまり「安心」である



【教師の位置】

子どもと同じ目線になって寄り添って考えてあげる。答えやヒントを与えているわけではない。



担任教師の関わりは大切である。担任以外の授業者の時に子ども達がどのように学んでいるか?気にかけて観察してほしい。





写真④

【 関係がつくる「考える」 】
 このグループの関係がいい。
 「訊く」ことを躊躇しない。訊かれたら寄り添い(写真④)。一人で集中しているときは邪魔しないで考えさせてあげる(写真⑤男の子)。それぞれが自分の気づきを語り、お互いの考えを共有する。『恥ずかしがる』こともなく、分かる者が見下すことも決していない。いい関係だ!



写真⑤



写真⑥

【 夢中になると身を乗り出す 】
 問題が簡単ではない、訊き合わなければ解決できない、説明ができない。課題が難しから「やりがいがある。」難しい問題に「夢中になる」必然性が生まれる。
 夢中になると身を乗り出す(写真⑥)。写真⑦、笑顔である。難しい問題で分からないことを笑顔で訊き合い「分かって」としている。学習意欲は何点ですか?



写真⑦

思考の度合いは何点ですか? 数値で測る必要なし。表情と仕草で見取ってほしい。教師の教材研究、テクキトの準備が子ども達に学びを創る。しかも「夢中」にさせてくれる。



【 共有する 】
 単なる発表にしないために、「聴く」側は常に自分の考えとの「すり合わせ」を意識させたい。分からない者にとっては「まねび」の対象となり、分かっていた者にとっては「なぜ」「なるほど」多様な考え方の共有の場としたい。それにしても仲間の発表の「聴き合う」姿がいい。

【 寄り添う 】 写真⑧、さて、どちらが「訊いて」いるのでしょうか? 「教えている側」「教えられる側」がはっきりしない。つまり両者が同等である。「確かめあっている」とも考えられるが、二人の寄り添い方に全く違和感を感じない。対等である。分からない者の「訊く」から「学び合い」が始まると大体においてこの雰囲気になる。「教える側」「教えられる側」の壁が払拭され教室の空気が心地よくなる。このような両者の関係がその日で形成されるわけもなく、日常の「分からないことは友達に訊くんだよ。」の教師の心構、声かけひとつで積み重ねられ形成されていく。カメラを向けても全く無視、当たり前のように「学び合っ」ている。このシーンを保護者が見たらどう思うだろう。私には、にこっと小さくほほ笑む保護者の顔が浮かぶ。



写真⑧

佐藤学 『学校を改革する』岩波ブックレットより

私は、どんなに優れた実践を行っている教師であっても、一年に一度も同僚に教室を開かない教師を公立学校の教師として認めない。どんなに優れた実践を行っているとしても一年に一度も教室を開かない教師は、子どもを私物化し、教室を私物化し、学校を私物化し、教職という仕事を私物化しているからである。(P19)

一人でも教室を閉ざしている教師がいる限り、学校を改革することは不可能である。すべての教師が授業を公開し、一人残らず教師たちが相互に学び合う関係が築かれてこそ、学校改革は実りある成果をあげることができる。そして、教師の研究の成果は研究の冊子にあるのではなく、教室における子どもの「学び」の事実にある。教室の子どもの「学び」の事実の創造に挑戦し合い、その事実を観察し合っってその事実から教師が「学び合う」ことが何よりも重要なのである。(P39)……ちょっと厳しい文面ではあるが納得させられる。

E先生、3回目の授業公開ほんとにありがとうございました。感謝に尽きます。

授業創りを深く楽しくやりたい。「すごい授業」を、と考えた瞬間から授業風景のイメージから子どもの姿が薄らいでいく気がする。教師の「すごい授業」より、子どもたちの素朴な「学び合う姿」、「支え合う姿」に一喜一憂する教師でありたい。… 考えたい、子ども達はどんな授業を望んでいるのだろうか?

国頭学びの会ゆい